

巖谷小波編  
日本昔噺  
第一編  
桃太郎



桃 太 郎

日 本 昔 噺

巖 谷 小 波 編

其 一 桃 太 郎

むかし、或る處に、爺と婆がありましたとき、或る日の事で、爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に、別れ、に出て行きました。

婆さんはやがて川へ来て、適宜處に盥を据ゑ、其中へ入れて来た、汗染みた襦袢や着古した單衣を、代るゝ取り出しては、頻りに洗濯して居りますと、やがて川上

日 本 昔 噺

の方から、一抱へもあらうと思はれる、素敵に大きな桃が、ドンブリコツコ、スツコツコ、く、く、と流れて來ました。

婆さんは之を見て、『さて、見事な桃ではある。妾も今年で六十に成るが、産れてからまだ此様な大きな桃は、つひに見た事が無い。然し喰へたらさぞ甘味からう、一ばんあれを拾つて行て、お爺さんの土産にしやう、それがよい』と、獨り點頭きながら、手を伸ばしたが届きません。四邊を見廻はしても筈はなし。一寸途方に暮れましたが、やがて工夫を考へて、流れて來る桃に向ひ、『遠い水は辛いぞ！近い水は甘いぞ！辛い處

桃 太 郎

は除けて来い！ 甘い處へ寄て来い！』と、手拍子を面白く拍つて、二三遍繰り返して言ひました。すると不思議にもその桃は、次第く寄て来て、婆さんの前で止まりました。

婆さんは急いで拾ひあげ、匆々に洗濯物を片付け件の桃を小脇にかゝへて、急いで吾家をさして歸りました。

今にお爺さんが歸つて来たら、囃喜ぶ事であらうと、待ちかまへて居りますと、やがて其日の夕方、爺さんは山で刈つた柴を、背中に負よつて歸つて来ました。婆さんは走り出て、『お爺さんく！ 先刻からお前の

日 本 昔 噺

歸るのを、何様に待つたか知れないよ。」「何だなア連忙い、留守に何か用でも出来たのか。」「其様な事ぢやないんだよ。お前に見せて喜ばせやうと思つて、妾は好いお土産を取て置いたのだよ。」「さうか其奴は豪氣だナ。」「と、是から足を洗つて上へ來ますと、婆さんは先刻の桃を重たさうに抱へ出して、「さア此を御覽！」と、爺さんの前へ出しました。

爺さんは見て肝を潰し、「やア是はでかい桃だなア。さうして一体此様な物を、何處でお前は買て來たんだ？」  
「ナニ買たんぢやない拾つて來んだよ。」「と是から以前の始末を話しますと、爺さんは聞いていよく喜び、「それ

桃 太 郎

は何より難有い。丁度腹も減てるから、早速御馳走に預からう。」と、勝手の方から庖丁を持ち出し、件の桃を俎板にのせて、眞二つにしやうとしました。

すると、不思議や桃の中から、可愛らしい子供の聲で、「お爺さん暫らく待た！」と、云ふかと思ふと、其桃が左右にさつと割れて、其中から一人の嬰兒が、ヒヨツヨリ踊り出しました。

此体に驚くまい事か、爺さんも婆さんも、一つより無い肝玉を潰して、アツと云つて倒れましたが。嬰兒はしづかに出て来て、「イヤ驚くまい、私は決して怪しい者ではない。實は天の神様から、御命を蒙つて降つ

日 本 昔 噺

たもので、其方衆二人が此年頃子供が無ない、と嘆なげいて居ゐるのを、神様にも不憫ふくみに思召おもほしめし、則すなはち私わたしを授さづけるから、吾わが子こにして育てろとおつしやるのだ。」と陳のべました。  
爺やいさんも婆はあさんも、之これを聞いて大喜おほよろこび、其儘そのまこの兒こをわが手てに育て、桃ももの中なかから産うまれたのだから、其名そのなも桃太ももた郎らうと付つて、蝶てうよ花はなよと可愛かわいがりました。

さて光陰ひかりひの經たつのは速はやいもので、桃太ももた郎らうやがて十五に成なりました。

すると或日あるひの事ことで、桃太ももた郎らうは父ちちに向むかひ、さて阿父おとうさん不圖ふとした御縁ごえんで親子おやこと成なり、長ながの年月としつきの御養育ごやういく、御恩ごおんは艸刈くさる山やまよりも高たかく、又また洗濯せんたくの川かはよりも深ふかく、何なんと御禮おれい

桃 太 郎

の申様も御座りません。」と改まつて申しますと、爺は却て迷惑顔、「是はしたり、苟にも親子となれば、子が親の世話になるに、何の不思議もない筈。それを今更改つて、禮では此方が痛み入る。」就きましては、其御恩も返さぬ中、かやうな御無理を申すのは、恐多い事では御座ります。茲に一つの御願が御座ります、何とお聞き下さりませんか。『余人と違つて其方の依頼、何なりと聞きまじやう。』『それでは今から私に、何卒御暇を下さるませ！』何暇を。『お暇と申しても霎時の間直きに歸つて参ります。』『シテそれは何處へ行くのぢや？』仔細を申さなければ御解りには成りますまいか、元來此の日

日 本 昔 噺

本の東北の方、を遙かに隔てた處に、鬼の住む島が御座います。其鬼共此の日本の國に寇を爲し、人を取り喰ひ、寶物を奪ひ取る、世にも憎くき奴で御座りますから、私只今から出陣致し、彼奴等を一挫に取て抑へ、寶を残らず奪ひ取て歸つて來やうと思ひます。」と云ひました。爺さんは之を聞いて年に似氣ない大膽な言葉に、一時は肝を消しました。何を云ふにも天から授かつた小供ですから、滅多に怪我はあるまいと、頼もしく思ひまして、「ウン面白い、お前が左様云ふ覺悟なら、何で私が止めやう。願通り暇をやるから、一時も早く其鬼が嶋へ押渡り、鬼めを退治て來るがよい。」と、さも快く許し

桃 太 郎

ましたから、桃太郎も大喜びで、翌日とも云はず其日か  
 ら、出陣の用意に取りかかりました。  
 爺さんは又兵糧の用意。兼て貯へて置いた黍を持  
 ち出し、勝手の土間に大きな臼を据えて、婆さんを相手  
 にベツタヲコくと、黍團子の製造に取り掛りました。  
 聴て黍團子も出来上る。桃太郎の行装も整ふ。其  
 處でイザ出陣と成ると、流石に離別は悲しいもの、爺さ  
 んも婆さんも、何時か兩眼は涙に曇つて、「コレ氣を付て  
 行きや！」芽出度く歸りを待て居ますぞ。」と、云ふ聲さ  
 へも震へて居ます。桃太郎も又た、それでは行て参りま  
 す。何卒御無事で、御機嫌好う！」と跡は胸一杯。思ひ

日 本 昔 噺

切て吾家を出ました。見送る爺婆見返る桃太郎……  
さても桃太郎は、兩親に別れを告げて、それから路次  
を急ぎましたが、丁度其の日の正午時分、腹も如何やら  
減つて参りましたので、路傍の木根に腰を掛け、用意の  
黍團子を取り出して、ムシヤ／＼遣つて居りますと、忽  
ち其の傍の艸原から、犢ほどある斑犬が一匹、ノソ／＼  
と現はれ出で、桃太郎に向つて牙を剥き出し、『ウーわん  
／＼！己れ此斑殿の領分を、斷りも無く通らうとは不  
屈な奴、其の喰つて居る辨當を、残らず置いて行けばよ  
し。異議に及べば此處で、頭から咬み殺してくれるぞ。  
ウーわん／＼！』と喝しかけました。

桃 太 郎

桃太郎は冷笑ひ、「何をぬかす野良犬奴！ 吾こそは此  
 度皇國の爲めに、鬼が嶋を征伐に參る、桃太郎と申す者  
 だ。邪魔立て致さば用捨はない、己こそ頭から眞二に  
 切て棄てるぞ。」と反對に叱りつけました。すると犬は  
 何思つたか、忽ち尾を股にはさんで、少さく成て蹲踞り、  
 さも恐れ入つた体で、「さては兼て聞及ぶ、桃太郎様で御  
 座りましたか。左様とも知らず只今の御無禮、何卒御免  
 下さりませ！」と尙も頭を地に摺りつけ、「さて此度は鬼  
 が嶋御征伐とあつて、此處を御通りの由、何卒私奴も御  
 供仰せ付られましやうなら、難有い幸福に御座ります」  
 『ウン所望とあらば只今より、供に連れるも苦うない。』

日 本 昔 噺

『早速の御聞届、この上の喜悅は御座りませぬ。就まし  
ては私も大分腹が減つて居りますから、只今召上りま  
した其御品を、何卒一個頂かして下さりませぬか！』是  
は日本一の黍團子、一個は遣られぬが半分やらう。』そ  
れは有難う御座ります。』と、斑は此處で黍團子を半分貰  
ひ、それから桃太郎の供を致して、尙も路を急ぎました。  
谷を越え山を越え段々遣て参りますと、忽ち前面の  
樹の枝から、一匹の獸がバサリと飛び下りて、桃太郎の  
前に平伏し、『これはく桃太郎様、好うこそ御出陣遊ば  
されました。何卒私奴も御供に……』と云ひ升と、斑は  
皆迄聞かず眼を怒らし、『桃太郎様の御供には此斑が付

桃 太 郎

いて居る。已等如き山猿が、軍の御用に立つものか。其處退けく、わんくく……と吠えながら咬付かうとします。根が仲の悪い犬の事だから、此方の猿も黙つては居ません、何を小癢なと牙を剥き出し、爪を反らして、今にも咬合を初めやうとしますから、桃太郎は双方を押し分け、『ヤレ待つたはやまるな、斑も暫らく控へて居ろ。』ちやと申して彼様な山猿が、君の御前を汚しますから。『イヤよいわ、貴様の知た事ではない。』トまづ犬を傍へ押しやり、更に又猿に向つて、『シテ其方は何者だ！』猿は兩手をつかへて、『ハッ私は此山に住む猿で御座ります。此度桃太郎様、鬼が島御征伐の御様子、何卒私も御

日 本 昔 噺

供致し度うござります。『それは近頃神妙な奴ちや。然らば其の志を愛で、日本一の黍團子を半分わけて取らすから、供をして参るがよい。』と最前犬に遣つた。團子の残餘の半分を之に與へ、其儘家來に致しまして、犬には旗を持たせて先に立て、猿は太刀持にして後に置き、自分は其中央に立て、軍扇を使ひながら、悠々として遣て行きました。

やがて或る野原へさし掛つて参りますと、唐突に足下から、一羽の鳥が飛び出しました。見れば大きな雉子です。犬は直ぐに飛んで行つて、一口に咬ひ殺さうとしますと、雉子も嘴を尖らして、犬に向つて食つ

桃 太 郎

てかゝりました。

桃太郎は之を見て、此奴は大分面白い鳥だわい、あゝ云ふ奴を味方に連れて行たら、又何その役に立つたらうと、心の中に思ひましたから、急いで其の場へ走りやり、力味かへる犬を制しながら、雉子に向つて態と大音に、「己れは何と思つておれの出陣を妨げるのだ？尋常に降参すれば家來にして召連れてやるが、尙も邪魔立致すならば、此斑犬をけしかけて、其素首を引千切て呉れるぞ。」ト一番虚喝しかけました。

すると鳥は驚いて、矢庭に其場へ平伏し、「ハ、ツ、さては兼て聞及ぶ、桃太郎様で御座りましたか、私は此野に

日 本 昔 噺

住む雉子で御座ります。さやうな大將の御通りと  
も存ぜず、御家來の犬と喧嘩をいたし、御詫の申様が御  
座りませぬ。御命に随ひ只今から、改めて降参致しま  
す。どうぞ犬さんや猿さんの様に、御供の役目仰付られ  
まするやう、偏へに願ひ奉ります。』ときも恐入つて陳べ  
ました。

桃太郎は片頬笑み、『早速の降参妙々。』此上は犬  
猿同様、鬼が島征伐の供を申付ける、随分共に忠義を致  
せ！』ハッ。』とそれから雉子も供の列に加はり、例の黍團  
子を半分貰つて、嬉しよろこんで尾いて参りましたが。  
大將の威勢はえらいもの、三匹共其後は大の仲好に成

桃 太 郎

て、一圖に桃太郎の命令を守り、尙も路を急ぎました。  
 急ぐほどに來る程には、や此處は陸の端です。前面  
 を見渡せば、只茫々とした大海で、更に眼に入る小島も  
 ありません。そこで桃太郎は、急いで船を拵へて、三匹の  
 家來と一所に、鬼が島さして乗り出しました。  
 追風に帆を揚げましたから、船脚殊の外速く、何時の  
 間にやら鬼が島は、前面の方に見えて來ました。  
 海の上から見渡しますと、斧で刪づる様な岩の上に、  
 鐵の門、鐵の垣根、中には又鐵の瓦を敷きつめた、大きな  
 家が幾つもあつて、その要害の堅固さ、中々容易に入ら  
 れさうもありません。

日 本 昔 噺

桃太郎は舟の舳に立て、小手をかざして見てありましたが、やがて雉子を呼びまして、「其方は羽根があるから、是から彼處へ飛で行き、中の様子を見て来い！」と云ひつけますと、雉子はハツと心得て、其儘身支度をなし、勇み進んで飛んで参りました。

雉子は大將の命を受けて、急いで飛で参りましたが、やがて鬼が島の真中の、城の屋根に降り立ちまして、羽ばたきを一ツしながら、「やアやア此島の内に住居する鬼共、確に承はれ、只今此處へ天つ神の御使、大日本の桃太郎將軍、征伐の爲めにお出向ひに成つたぞ。命が惜くば速に角を折り、寶を捧げて降参しろ。若し又双向ふ時

桃 太 郎

に於ては、かく云ふ雉子を初めとして、犬猿の猛將の面々、日頃鍛へた牙にかけて、片ツ端から汝等を咬み殺して呉れるぞ！』と大音聲に呼はりました。

すると此島の鬼共は、之を聞いて大に笑ひ「シャ小賢かしい野雉子奴。征伐呼はり片腹痛い、イデ此の鐵棒の味を見よ。」と虎の皮の犢尾褌を、め直しもせず飛び掛つて微塵に成れと打ち降ろす。此方の雉子も元より去る者、小癢なと引ッ外づし、嘴を反らして鬼の腦天を、只一ト突に突倒す。之を見て一匹の赤鬼、又も鐵棒で打つてかゝるのを、同じく胸板を突き破る。又來る鬼を爪で蹴返し、續いてかゝるを突飛ばし、此處を先途と

日 本 昔 噺

闘たたかひました。

其その中に犬いぬと猿さるは、船ふねからヒラリと陸をかへ飛とび下おり、はや

大おほ手の鐵てつ門もんを破やぶつて、ドツと斗はかりに踊おどり込こみました。

敵てきは一羽はの雉き子じばかりと思おもつた處ところへ、又また犬いぬ猿さるの二匹ひき

の者ものが、矢庭やにはに踊おどり込こんで参まゐりましたから、鬼おにも今いまは一生いっしやう

懸命けんめい、ソレ其奴そやを追おッ拂はらへ、彼奴きやつを打うち取とれッ、と、赤青あかあは黒くろ

の小鬼こおに共ども、三手さんてに分わかれて拒こぎ闘たたひ、其鯨波そのときの聲こゑは浪なみの音おと

と一緒いっしょに成なて、天地てんちも崩くづるゝ斗はかり、凄すげましい有様ありさまです。

其その中にさすがの鬼おにも段々だんだんに弱よほりまして、見みる／＼中うち

に追おひまくられ、海うみに溺おぼれて死しぬもあれば、岩いはに落おちて

碎くだけるもあり。其その他た犬いぬ猿さる雉子きじの牙きばにかゝつて討うたれ

桃 太 郎

る者數を知らず。果は鬼が島に生殘る者は頭の大鬼  
斗りに成りました。

すると件の大鬼も、敵はぬ處と覺悟をしたか、やがて  
鐵棒をカラリと投げ棄て、自分で自分の角を折て、寶物  
と一所に桃太郎の前へ出し、蜘蛛の様に平伏して、「ハ、  
ッ恐入った桃太郎様の御威勢、此上は何しにお抵抗致  
しましやう、今日限り心を改め降參致しまする程に、命  
斗りは御助け下さい！」と涙をボロ／＼流しまして、意  
氣地なくも降參と來ました。

桃太郎はすぐに此の大鬼を繩でしばつて、猿に之を  
曳かせ、又犬と雉子には、ぶん取りの寶物。まづ隠簀、隠

# 日本昔噺

笠を初めとして、打出小槌、如意寶珠、珊瑚、玳瑁、眞珠の類を大きな函に入れて、擔がせ、再び以前の船に乗て、目出度凱陣を致しましたとき。待ち焦れた爺さん婆さんの喜悅は申し上る迄もない事。いよく市が榮えましたとき。めでたしく

日本昔噺  
第一 桃太郎 終

追次刊行目次

|     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |      |      |      |      |      |
|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|
| 第一編 | 第二編  | 第三編 | 第四編 | 第五編 | 第六編 | 第七編 | 第八編 | 第九編 | 第十編 | 第十一編 | 第十二編 | 第十三編 | 第十四編 | 第十五編 |
| 桃太郎 | 猿蟹合戦 | 山姥歌 | 大江山 | 舌切  | かき  | 癩癩  | 臭取  | 福茶  | 頭生  | 羅門   | 龜蛇   | 釜郎   | り山   | 太雀   |
| 井郎  | 戰鏡   | 爺山  | 雀山  | 太雀  | り山  | 釜郎  | 龜蛇  | 門   | 生   | 頭    | 羅    | 龜    | 蛇    | 門    |

嚴谷小波君原著校訂  
 英國リッデル女史英譯  
 米國グリーン女史英譯  
 日本津田梅子女史英譯  
 日本昔噺  
 正價壹冊金十三錢 郵稅貳錢

不許複製

(日本昔噺桃太郎與付)

正價拾三錢

發兌元 博文館

發兌元 東京堂

大賣捌 川瀬代助

英學新報社藏版

印刷者 水谷景長

印刷所 合資博進社工場

明治三十六年四月廿九日印刷

明治三十六年五月一日發行

發行所 田村泰真吉